学部学生の教育実践力を育てるための卒業研究のあり方

特別支援教育講座　　長尾秀夫

１．授業の概要

卒業研究は教育学部学生にとって、卒業のために取得しなければならない必須単位の重要科目である。授業担当教員は１人である。そして、受講学生は発達障害コース４回生が3名である。

授業の目的は、地域の小中学校で特別支援教育対象児の支援を行う。参与観察の基で対象児の支援方法、学級全体の支援方法、教員の活動を学ぶ。

到達目標は、１）特別な支援を必要としている子どもの実態を知り、具体的に説明することができる。２）特別な支援が必要な子ども、その他の学級の子ども、学級担任の支援方法を工夫して実践することができる。３）子どもや教員とかかわり、協調して働くことを学ぶ。

関連するディプロマ・ポリシー（DP）は、①教育活動に取り組むため，高い技能と豊かな表現力を身につけている。(技能・表現)
②自己の学習課題を明確にし，理論と実践を結びつけた主体的な学習ができる。(関心・意欲）である。

２．授業方法

１）研究に関する対象児、学校について希望を聴取する。２）教育支援の具体的なまとめ方をガイダンスする。３ー１４）実習校での子ども、教員の支援についてレポートを毎週作成して報告し、その理解と具体的な支援方法を話し合う。同時に先行研究を調べ、子どもと自分にあった支援の工夫を企画する。１５）前期の成果をまとめてレポートする。１６）後期の実習について具体的な目標を確認する。１７ー２９）実習校での子ども、教員の支援を継続し､文献を参考に支援を行う。３０）卒業論文を発表して、コース教員全体で評価する。

３．アンケート結果

(1) ディプロマ・ポリシーに関連して

DP１の知識・理解について、１Aの知識の習得では十分貢献 1/3、貢献 2/3、１Bの専門的知識が十分貢献 1/3、貢献 2/3 であった。DP2 の思考・判断について、２Aの課題の理解では貢献 3/3､２Bの対応策の習得が十分貢献 2/3、貢献 1/3 であった。DP3 の技能・表現について、３Aの技能の習得が貢献 3/3、３Bの表現力の習得が貢献 3/3 であった。DP4 の関心・意欲について、４Aの学習課題の明確化が十分貢献 1/3、貢献 2/3、４Bの主体的な学習意欲が十分貢献 1/3、貢献 2/3 であった。DP5 の態度について､５Aの責任感の形成が十分貢献 2/3、貢献 1/3、５Bの対人関係力の育成が十分貢献 2/3、貢献 1/3 であった。

（２）授業の特性上追加した質問について

１）自分が教員になるにおいて研究が役に立ったこと？対象児童に合わせた教材・教具を作り、実際に支援に使う経験が出来た。自分の支援をコミュニケーション記録と教材を基に振り返ることが出来た。通常の学校の先生方の授業を見て、多くのお話を聞くことが出来た。毎回の支援に当たって先行研究を指導書や文献を調べて準備することの重要性がわかった。

２）毎週のカンファレンス（本授業）が役立ったこと？3 人で、時に大学院生２人を入れて５人と教員で話し合いを行い、他の人の考え方､支援の工夫のアイデアがいただけた。具体的支援場面を基に、支援のあり方を話し合ったので即実践に結びつき、支援の成果を毎回発表できた。教員からの情報も文献紹介など役立った。

３）今後の授業で必要なものは？具体的支援の方法を授業の中でも学ぶこと、文献を活用して支援をすることなどの練習ができるといい。

４．総括

卒業研究が学生の学校教員としての実践力向上に役立ったことは、卒業研究の成果、発表会の報告から明らかであった。しかし、ＤＰアンケートを見ると、その評価が曖昧で、学生に対するこのようなアンケートの限界を感じている。